

---

# 【ホラー】重いはがき

たいらひろし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ホラー】重いはがき

### 【Nコード】

N0343Z

### 【作者名】

たいらひろし

### 【あらすじ】

怪談調の物語。郵便局に勤めている朽木蛭子の兄は、郵便配達中に身の毛もよだつ体験をする。pixivに掲載している小説を転載しております。

## 語り部：朽木蛭子？

ふふふ。

こんばんは。一年の朽木蛭子と申します。

これから語るのは、あたしのお兄さんが実際に体験した話です。あたしのお兄さんは郵便局で働いています。ああ、内務じゃなくて外務。外に出て、あたしたちに郵便物を配達してくれるひとね。そう。これから語るのは、そのお仕事に関係した怖い話です。

彼はよくいうのですよ。配達する郵便物のなかには、正体不明のものがたまにある。それを配達するのが怖い、と。

たしかにね。爆発物や劇薬、刃物が混じっている可能性が皆無とはいいきれませんし。それがなにかの拍子に爆発したり、漏れ出てしまうことも考えられますからね。

それに　そうそう。そういうもののほかに、生物を運ぶこともあるらしいんですよ。

ええ、生物ですね。たとえば、スズムシやカブトムシとか　あら、いやですねえ、犬や猫なんかを普通郵便で取り扱うわけじゃないですか。バラバラにされたものならいざ知らず、ですけど。

ふふふ。

でもね。そういう当たり前の意味で危険なもの以外にも、怖いものを配達するときがあるんですって。このあいだお兄さんが配達したものが、それだったそうです。

それはね。はがき、だったそうです。

ええ、ただのはがきですね。毒が塗ってあるわけでもなく、カッターの刃が仕込まれているわけでもない、普通のはがきです。そのはがきに、お兄さんは身も凍る恐怖をおぼえたそうです。

今回は、ちょっと趣を変えて、彼自身の体験を追う形にしましょうか。

この物語の主人公はあたしのお兄さん　『僕』です。

では、語りましょう。

語り部：朽木蚩子？（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベル、そしてえっちな小説など手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（・ ・ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=131262】

## 兄の物語 ？

『私たちの暮らしてるアパートの家賃が、もう二ヶ月も滞納されてます。どうかお願いします。お金を振りこんでください。あなただけが頼りです』

市営住宅の集合受箱の前で、僕はつい配達中のそのはがきをつい読みふけてしまった。あまり上手とはいえない文字に鉛筆書きのそのはがきは、いま僕が郵便バイクで到着したばかりの市営住宅の一五号室の受箱へ届けなければいけないものだ。それをふとしたはずみで裏返したときに文字を読んでしまい、そのまま目が釘づけになってしまった。

もちろん、たとえ郵便局員であろうと、差出人からののはがきを熟読することなど許されない。倫理的な問題もあるが、それ以前に社則により禁止されているのだ。お客さまのはがきを読んではいけない。常識である。

でも、なんでだろう。僕はこのはがきから重力のようなものを感じてしまい、どうしても目が離せなかった。ときどきあるのだ。こういうひとの目をひきつける？ 情念？ の宿ったはがきが。

……しかし、さすがにこの場でこれ以上読んでいたら人目についてしまうだろう。そう判断した僕はすぐにそのはがきを――五号室の集合受箱へ投函し、すみやかにその場を去った。その後、バイクを繰り返して配達を続けるうちに、さっきのはがきのことなど忘れてしまった。

数日後、また同じ差出人からはがきが届いた。

『安男の給食費を払わなくちゃいけないけれど、でもお金がないの

で、生命保険を解約しました。今日も夕食はアンパン一個と牛乳だけです。これでは生活していけません』

セミがうるさい。暴力的なまでにかんかん照りつける太陽の下、汗を流しながら例の集合住宅のポストへ郵便を届けていたとき、またあのはがきを見つけた。そしてつい、また読んでしまった。おなじ文面に字体。書いたのは同一人物だろう。

僕は罪悪感を覚えながらも、このはがきの内容について考え始めた。

夕食がアンパン一個と牛乳だけ。これは本当だろうか。ウソでないとすると、生活環境は相当に逼迫していることになる。

生活保護は受けているのだろうか。僕は法律には明るくないが、このはがきの差出人が本当に記述のような貧困生活にあるのだったら、国が自治体が生活保護費を出してくれるのではないだろうか。それに一枚で五〇円とはいえ、はがき代だってばかにならないはずだ。

このはがきは、重い。？情念？という意味だけでなく？金銭？という面でも重く感じた。

このはがきの差出人はどういう生活をしているのだろうか。文化的な暮らしを送れているのだろうか。

僕はいぶかりながら、その日もはがきを――五号室の受箱へ投函した。――五号室の受箱の蓋に？見崎？と書いてあるのを、ちらりと横目で流し見た。

セミがうるさい。

『どうにか水道代は払えましたが、ガス代まで手が届きません。あなたに人間の心があるのなら、どうかお金を送ってください。今月分も家賃を滞納してます。もうこんな恥ずかしい思いはたくさんで

す』

『わたしたちがこんなに苦しんでいるのに、どうして平気でいられるのですか。あなたにはお金があるのに、どうして助けてくれないのですか。あなたをひどいひとだと思いたくありません』

九月の半ばに入っても灼熱の日々が続く。日光が道路を焼き、陽炎が視界をさえぎるほどだ。

どこにでもある集合住宅へ届く、そのはがき。

もはやおなじみになりつつある、つたない文字のはがき。

僕が把握しているだけで、これが四枚目のはがきになる。が……。なにか、どんどん、内容が、苛烈になってきていくような気がする。

金を無心するにしても、こんな相手を責めるような、まるでがきの受取人のほうが悪いような書きかたはないんじゃないか。これでは、まるでたかりである。どうして助けてくれないのか、と書かれても、見崎氏には見崎氏の都合があるだろう。なのに、まるで自分ばかりが被害者であるような書きかた……。

始めこそ差出人に同情を寄せていた僕も、次第にこのはがきの主へ嫌悪感に似た想いを抱くようになっていった。

このはがきの受取人の見崎氏は、どういう心境でこれを読んでいるのだろうか。少なくとも僕だったら、薄気味悪くてとても最後まで読む気にはならないだろう。他人事だからこうしていられるが……。

いけない。仕事を忘れるところだった。

はがきのすみをつまむようにして、僕はそれを――五号室？見崎？の受箱へと入れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0343z/>

---

【ホラー】重いはがき

2011年12月1日23時48分発行